

去る十一月九日（土曜日）、東京ドームホテル天空にて、「立教小学校同窓会設立七十年祝賀会」が華々しく開催されました。

当日集まったのは八百名ほど。それもほぼ男性のみ。言わずもがなですが、立教小学校は男子校。ですから卒業生は当然男子のみ。旧・現教職員の女性が十数名参加でしたが、男性ばかりの集団の圧力!?!に、ホテルの方々は、さぞビックリされたことでしょう。

アルコールも提供されるということから、二十歳以上の同窓生限定の参加。つまり本校卒業の六十三回生から一回生までが参加資格ありということになります。ちなみに六十三回生は、全員が二十歳以上。一回生は八十三歳とされます。



第一部は、聖歌・お祈りに始まり、同窓会長挨拶、来賓祝辞、旧・現教職員紹介、前同窓会長に記念品贈呈、乾杯と続き、懇談。

第二部は、タイムカプセル開封、新校舎についての説明、オークション、最多出席回生表彰、「立教生が歩む道」斉唱、立教大学応援団による応援披露、お祈り、実行委員長（二十六回生）による閉会の辞でお開きとなりました。

今回の「つぶやき」では、第二部のタイム

カプセル開封にスポットを当てて、ご紹介し

ます。このタイムカプセル、校舎の定礎の中に封入されていた鉛でできた二つの箱のことです。校舎を壊す際に、定礎の中から取り出された二つの箱を、今回、同窓生のご覧になっている目の前で、「開封の儀」を行うという企画なのです。開封役は、私と同窓会長。

立教小学校最初の木造校舎の定礎式は一九四八（昭和二十三）年九月二十日、午後一時半。理事・同窓会員・来賓などが工事現場に集まって定礎式を挙行したこと。当時の理事長、松崎半三郎氏により定礎の石の中に入れられた物は、聖書、第一回生の保護者及び児童名簿、学院理事名簿等だったが、『立教小学校十年誌』に記されています。

私の開封した鉛の箱の中には、蓋つきの直方体の缶が入っており、その中に新約聖書が一冊。聖書の中に折り込まれて入っていたのは、第一回生の保護者及び児童名簿、学院理事、教職員の名前が墨字で記された紙と、どういう訳か、昭和十九年の十銭と昭和二十二年の五十銭銅貨が二枚挟まっていました。それに、一九四八（昭和二十三）年七月二十九日の毎日新聞と同年九月二十日の読売新聞が折りたたまれて入っていました。その直方体の缶の上に『立教小学校十年誌』、当時のお祈りの本、紙封筒。封筒の中には、「一九六四（昭和三十九）年十月二十七日午後二時半」

と記されている「新校舎定礎式文」、「一九六四（昭和三十九）年四月一日現在」と書かれている「PTA役員名簿」。昭和三十九年の資料以外には、昭和二十三年の木造校舎の鉄入れ式や定礎式の写真が数枚入っていました。紙封筒の表にある「木造校舎部分追加昭和三十九年十月十五日 立教小学校」という墨字の意味が分かりませんでした。

同窓会長の開封した箱には、聖書、イスラエルの石や、コンクリート新校舎の設計図や契約書、一九六四（昭和三十九）年十月二十七日の毎日新聞、教職員の寄せ書き、学院の寄附行為、一九六四年の大東京祭（東京オリピック）の河童のバッジ等々、一九六四（昭和三十九）年の新校舎定礎式関係の物が入っていました。思うに、昭和二十三年の木造校舎定礎式で封入していた物を昭和三十九年十月十五日に新校舎定礎式関係の物に追加、二つの鉛の箱に入れ、新校舎定礎式の十月二十七日に石の中に一緒に納め、現在に至ったようです。『立教小学校十年誌』の記述と私が開封した直方体の箱の中身が一致しているところを見ると、昭和二十三年の木造校舎定礎式に納められていた物は、蓋つきの直方体の缶だけだったのかもしれない。

先人の熱い思いの上に今の学校がある。これを肝に命じつつ、我々の新校舎の定礎の中には、「夢」として、何を入れましょうか。

（立教小学校校長 田代 正行）